

第6話 外国との交通

国内の統一を固くし、泰平の基を定めた家康は、更に海外諸国との通商を奨励して、大いに国富を増そうと図る。江戸時代の初期における邦人の盛んな海外渡航。

関が原の戦いに勝って、天下の実権が徳川氏に帰した頃から、家康は力を国内の政治に用いると共に、外交にもまた心を向けた。彼は夙に貿易の利を知っていたので、平和の手段によって諸外国との交通も開き、以って国富を増そうとしたのです。

朝鮮および明との交通

朝鮮および明国との国交は、秀吉が朝鮮を征伐して明軍と戦いを交えて以来まったく絶えていた。家康は、これを回復しようとして、まづ対馬の宗義智に朝鮮と交渉させて、且つ俘虜（捕虜）をも還してやった。

朝鮮は初めは何かと遅疑してぐずぐずしていたが、ついに漸くこれに応じたので、ここに両国の国交は旧に復して、爾来、將軍の代わり毎に慶賀の使いを送って来た。

幕府も厚くこれを待遇したが、この慶賀使の



朝鮮通信使の行列

一行は、上下数百人から成り、対馬から江戸まで堂々と行列をつくってやって来たので、一時は中々の壯観でした。

家康はまた明との交通をも回復しようとして、薩摩の島津氏に命じて、琉球王を明との間に入れて交渉にあたらせようとしたが、ついに要領を得なかったので、更に本多正純に命じて書を明に送らせた。しかし、明はついに応じなかった。けれども、明の商人は毎年長崎に来て貿易を営み、後に、清が起って明に代わっても、通商はもとの通りつづけられた。

この明が亡んだ時の話ですが、ついでにここで述べておきたいのは国姓爺鄭成功の事です。

鄭芝龍

鄭成功は明の遺臣鄭芝龍の子です。母は日本の婦人でした。父の芝龍が若い時に日本に来て、肥前の平戸に住んで、その土地の田川七左衛門の娘を娶って彼が産まれたのです。

明が亡んだ時に、芝龍らは中国に帰って、明帝の一族を奉じて兵を福建省に挙げたが、兵力が不足

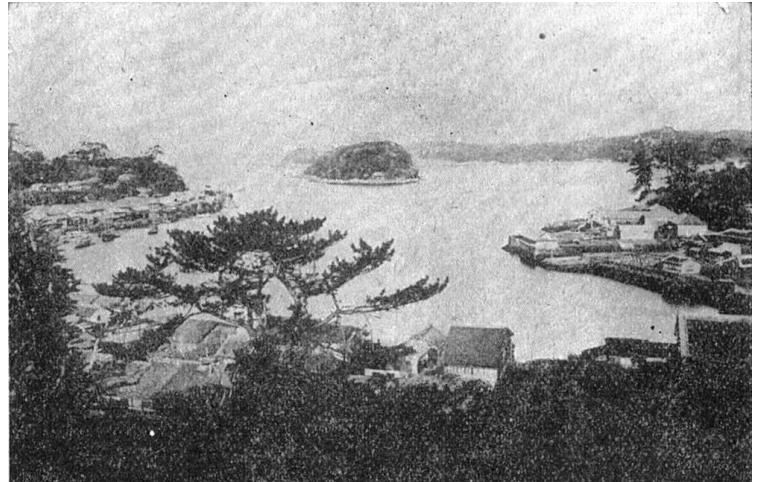
第6話 外国との交通

なために、使いをわが国に送って援けを求めた。^{いえみつ}家光が将軍の時です。幕府は御三家を始め、重臣らを集めて相談した。

この時、紀伊家の^{よりのぶ}頼宣、尾張家の^{よしなお}義直、水戸家の^{よりふさ}頼房らは皆、援助に賛成で、自ら総大将となって援けに行こうかとまでいったが、^{ひと いいなおたか}独り井伊直孝が、今は未だ国内の整理が大切であるのに、^{つか}自国を疲れさせてまで他国を助けるのは愚かな事であると言って反対したので、^{おろ}結局、^{けっきょく}援助は断った。

国姓爺鄭成功

^{しりょう}芝龍は、その後、^{くだ}清朝に降って、ついに殺されたが、^{せいこう}子の成功は少しも^{こころざし}志を変えずに明朝の^{さいこう}再興を図り、^{はか}後には^{たいわん}台湾を^{せんりょう}占領して、^{いしん}明の遺臣を集めて、^{いしん}明帝の一族を奉じて^{いしん}独立国を建てていた。世に^{こくせん}彼を^や国姓爺と言うが、これは^{しゆせいこう}彼が^{せいめい}明の王から^{たまわ}朱成功という姓名を賜ったからで、^{せい}(朱は明の皇室の姓ですから、^や明国の姓を賜った人、即ち国姓の人で)、^や爺は^{そんしょう}尊称です。



長崎 ^{ひらど}平戸港

^{せいこう}成功は不孝にも 39 才で^{にわ}俄かに^{かか}熱病に罹って死んだが、その後も^{しそん}子孫は志をついで、わが第 112 代^{れいげん}靈元天皇の天和 3 年 7 月、^{つなよし}五代将軍綱吉の時代に、清の大軍に攻め寄せられて、清朝に抵抗しつづけていた。実に、^{せいこう}成功が父と分かれて^{ぎへい}独りで^あ義兵を^よ挙げてから 37 年目で、台湾に^よ拠ってから 23 年目でした。さすがに^{ていせいこう}鄭成功は日本人の血を受けているが、その子孫までも^{めづら}実に中国人には^{ちゅうれつ}珍しい^し忠烈の士であったのです。今も肥前の^{せいこう}平戸の^{たんじょうち}成功の^{あと}誕生地の跡には、^{じせき}彼の事蹟を伝える記念碑が立っています。(訳注：台湾の台南市に、^{びょう}廟と^{ていせいこう}鄭成功像があります。)

琉球征伐

さて、明との交通も回復しようとするのに、^{りゅうきゅう}琉球王を^{あいだ}間に^{こうしょう}入れて交渉させようとしたと書いたが、この琉球は、もとは^{しまづ}島津氏の^{りょうぶん}領分でしたのに、いつからかその関係が絶えて、南北朝時代からずっと明に^{しんじ}臣事していたのです。^{ひょうろう}秀吉の朝鮮征伐の際にも、^{めい}兵糧を出すようにという^{かえ}秀吉の命にも従わずに、却って明に^{ないつう}内通したほどでした。

その後、^{らいちょう}徳川家康が将軍になってからは、^{うなが}島津家からしばしば使いを出して来朝を促したが、琉球は全くこれを^{かえり}顧みようとしなかったもので、ついに慶長 14 年 3 月、^{いえひさ}島津家久は幕府の許しを受けて、兵を遣わしてこれを討った。4 月、^{しゅり}島津勢が琉球に上陸して、^{おうじょう}交戦 3 日の後に^{かこ}首里の王城を囲むと、^{しょうねい}王の^{そうこう}尚寧は倉皇として(あわただしく)出て降った。そこで^{くだ}島津勢は^{とりこ}彼を虜にして、6 月に^{がいせん}鹿児島に凱旋した。

2 年の後、幕府は^{しょうねい}尚寧を赦して、琉球に帰らせて、再び王としたが、これより永く琉球は^{なが}島津氏の

第6話 外国との交通

ぞくりょう みつぎもの おさ いわいごと
属領となって、年々貢物を納め、將軍家や島津家に祝事のある時には、お祝いの使いを出すことになった。もともと、琉球は中国に対してもまた交通を絶たずに、やはり貢物を出していたが、これは島津氏も許していたのです。

オランダ船の来航

ポルトガル人とイスパニア人とが我が国に来航して、九州地方の諸大名とさかんに貿易を営んだことは、すでに戦国時代の1話でこれを述べておいたが、このころ、ヨーロッパの方では、オランダが新興の勢いに乗じて、しきりに遠洋航海を奨励し、力を東洋貿易に注いでいた。

三浦按人

オランダの国の商船が初めて我が国に来たのは慶長5年3月でしたが、家康は、折柄、秀吉の後を承けて大いに海外貿易を盛んにしようとしていた時でしたので、それが豊後（大分県）の海岸に着いたと聞くと、命じてこれを堺に廻らせて、更に又、浦賀に廻させ、その乗組員のオランダ人ヤン・ヨーステン及びイギリス人ウィリアム・アダムスの兩人を江戸に呼んで、くわしく海外の事情をたづねた。そして、いよいよ海外貿易の利をさとると、2人に邸宅を与えて、ながく江戸に留めて外交の顧問とした。

ヨーステンは後に許可を得て帰国したが、アダムスはますます家康の信任を得て、三浦半島の逸見（今の横須賀市内）に五百石の知行をもらい、名を三浦按人と改め、日本婦人を妻に迎えて、江戸の邸に住んでいた。その邸のあったところは、今の日本橋から東北方の程近い一角で、ごく最近までは按人町の名が残っていて昔を偲ばせたものです。又、麴町の八重洲町は、耶揚子すなわちヤン・ヨーステンの邸のあったところです。

アダムスはまた家康の命を受けて、伊豆の伊東で120トンの西洋式の船を造り、これを江戸に廻して隅田川に繋いでおいたが、これが後に日本人が初めて太平洋を横断する時に用いた船となったのでも聞かしている。その他、彼が家康の顧問として我が外国貿易の上で立てた手柄は少なくなかったのも、かれの墓と称される横須賀市の逸見の按人塚には、彼の事蹟を称えた記念碑が立っています。

オランダ、イギリスとの貿易

さて、オランダはこの頃、東インド会社を起こし、ジャワ島にバタビア府を開いて東洋貿易の根拠地としたが、慶長14年5月、アダムスの周旋によって、その商船が二隻、平戸に入港して通商を求めた。家康はまたこれも許して、平戸に商館を建てさせた。

こうして平戸の貿易はますます盛んになったが、間もなくイギリス人はオランダ人との競争に敗れて、利益も少なかったのも、商館を閉じて我が国から去った。それで、後にはオランダ人だけが独り我が国との貿易の利を占めることになった。

日本人の最初の太平洋横断

家康はまたイスパニアの宣教師から南洋の事情を聞いて、呂宋の太守に書面を送って交通を開こうと

したり、又、その頃イスパニアの領地であったメキシコ（当時はノバ・イスパニア、新イスパニアの意）と交通を開こうとして、商人をやって通商を求めさせたりした。アダムスが造った船が役に立ったのはこの時のことです。即ち、幕府はその船をサンタ・ベナベンツラ号と名づけて、当時わが国に来ていた宣教師のアロンソ・ムニョスを家康の使者とし、なお京都の商人田中勝助、同庄次郎、朱屋隆成および堺の商人山田助左衛門らをこれに乗り込ませた。一行は慶長15年の夏に江戸を出帆して無事にメキシコに着いた。これが実に日本人が太平洋を横断した最初です。

この一行のうち、田中勝助らは翌16年4月、ラシヤ、葡萄酒などを持って帰って来たが、肝心の家康の使者であるムニョスは、本国のイスパニアに赴いたとかで帰って来なかったの、交通のことは成功しなかった。

伊達政宗がローマに使いを遣わす

そこで、伊達政宗が家康の内命を受けて、更に家臣の支倉六右衛門常長らを遣わした。慶長18年9月15日、常長らは陸前（宮城県）の月の浦を出帆して、12月16日にメキシコのアカブルコに着いた。それより首府のメキシコに入って総督の優遇を受けた後、翌19年（西暦1614年）5月、更に大西洋を渡ってヨーロッパに入り、イスパニア王に謁して、政宗の書面や進物を差し出し、日本との交通貿易を開くことを求めた。

しかし一方、わが国では当時、しきりにキリウト教を禁止していたので、イスパニア王は、却ってキリスト教の保護を頼む旨の返書を渡しただけで、交通貿易の事はついに承諾をしなかった。

常長らは更にイタリアに行き、ローマ教皇にも謁してその助力を請うた。しかし、ついに使いの目的を達することが出来ずに、イスパニアからまたメキシコに渡り、再び太平洋を横断して、元和6年（西暦1620年）8月、奥羽に帰り着いた。出発以来ちょうど7年を費やしたわけです。

御朱印船

このように、家康は海外との交通を奨励したので、外国人の渡来が漸く盛んになるにつれて、邦人でも海外に渡航して貿易に従事する者もまた次第にその数を増した。彼等はそれぞれ大船を造り、幕府の朱印が押してある免許状を得て航海に出た。この免許状を朱印状といい、この船を御朱印船といった。

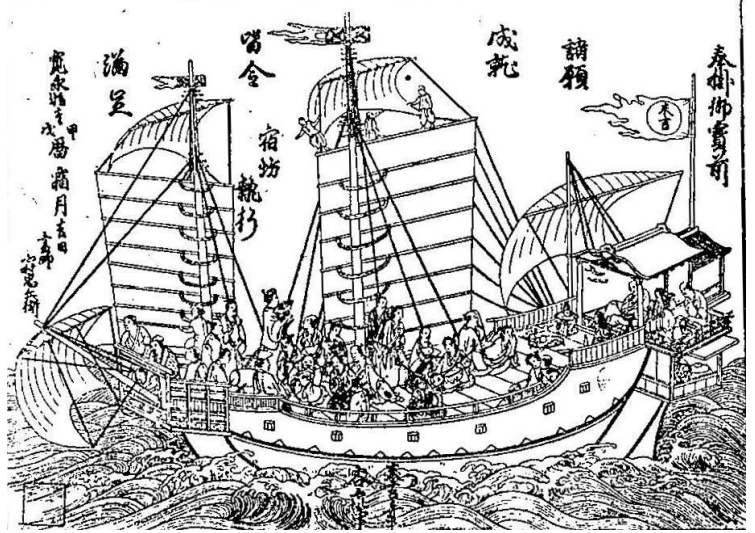
尤も、この御朱印船は、すでに秀吉の時代からあったもので、もとは倭寇、即ち人幡賊の船と区別するために御朱印を押した渡航免許状を渡したのが始めです。秀吉にフィリピン征伐を勧めたり、台湾に使いして、これを服従させようとした原田孫七郎や、呂宋助左衛門と称していた堺の商人魚屋助左衛門などは、そのころすでに早く呂宋に渡って、貿易を営んでいたのです。

著名な貿易商



はせくらつねなが
支倉常長

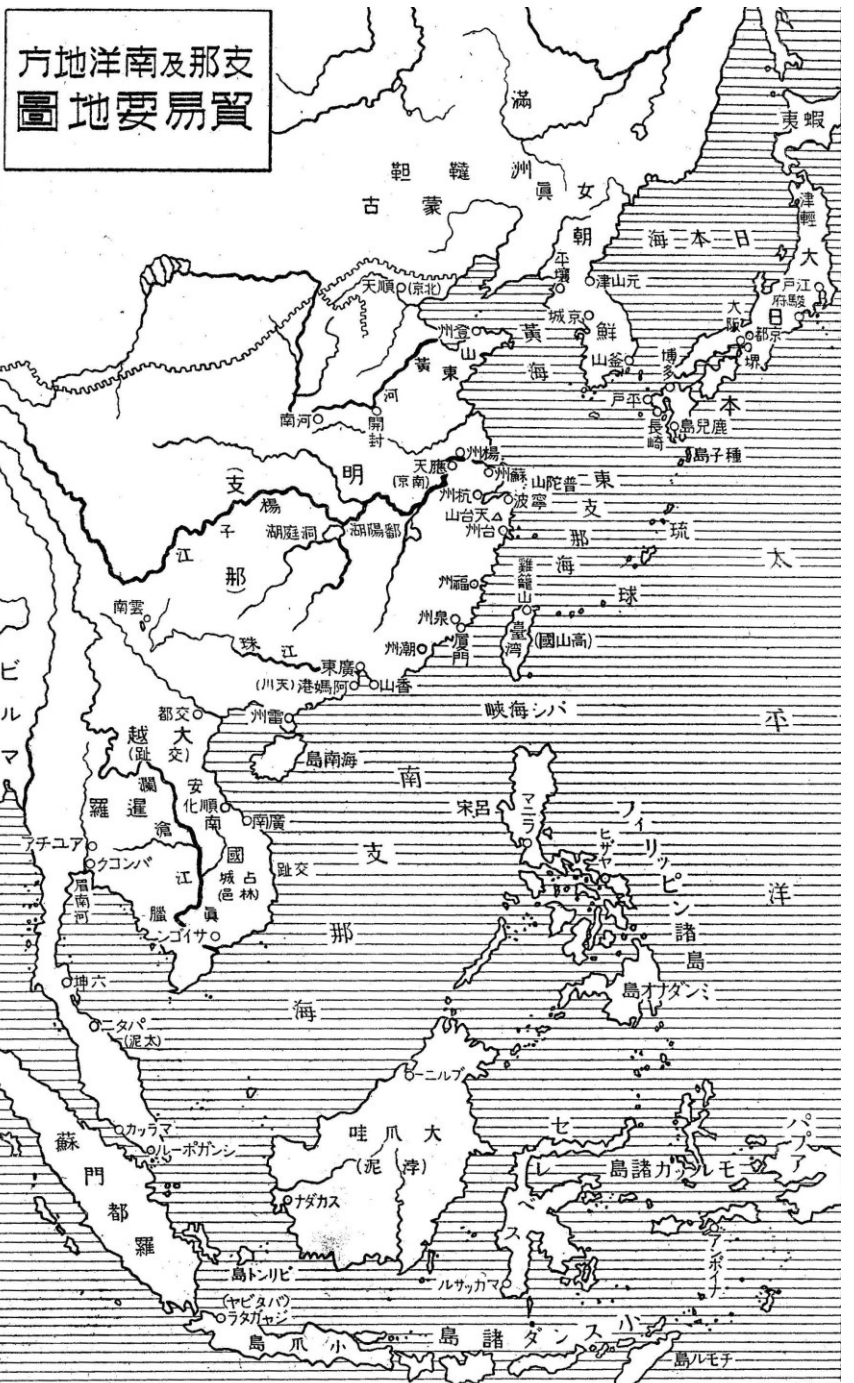
しかし、これが大いに盛んになったのは家康、秀忠の時代でした。 当時は年々数十通の朱印状を下付したと伝えられている。 京都の角倉了以、茶屋四郎次郎、長崎の末次平蔵、荒木宗太郎、摂津平野の末吉孫左衛門、近江八幡の西村太郎右衛門、暹羅屋勘兵衛、伊勢松坂の角屋七郎兵衛らはわけても著名な貿易商でしたが、この外にもまだ、島津、鍋島、加藤、細川、松浦、有馬らの大名および近畿地方の大寺院などもそれぞれ御朱印船を出して貿易を営んだ。



末吉船

その渡航をして行った先は、中国の澳門から安南（ベトナムの呼称）、カンボジア、呂宋（フィリピンのルソン島）、暹羅（シヤムはタイの古名）、爪哇（インドネシアのジャワ島）、などのいわゆる南洋地方でしたが、かの有名な天竺徳兵衛のごときは（天竺はインドの呼称）、遥かに遠く南天竺まで行っている。 彼は角倉の船に乗り込んでいた1人でして、始めは米沢徳兵衛といったが、2回も南天竺に渡ったので、天竺徳兵衛と呼ばれたのです。

こうして、南洋貿易が盛んになるにつれて、邦人の海外に移住するものも多く、暹羅、呂宋、安南などには日本人町さえ出来るに至った。 従ってまた邦人が彼の地に在って勢いを振るい、我が国の名を海外に輝かしたのも少なくなかったが、中でも殊に聞こえたのは山田長政、浜田弥兵衛らでした。



第6話 外国との交通

やま だ ながまき

山田長政

やま だ ながまき するが げん な シヤム おりから シヤム
山田長政はもと駿河（静岡県）の人です。 元和のころに暹羅（タイ）に渡ったが、折柄、暹羅には
ないらん おちい ながまき ひき く
内乱があって、国内は不安の状態に陥っていた。 長政は日本人町の人々を率いて王の身方となり、苦
そくぐん たい たいぐう
もなく賊軍を破ってこの乱を平らげた。 国王は大いに喜び、彼を貴族として待遇することにしたが、そ
リゴール しゅうちよう そむ シヤム
の後、六昆（マレー半島南部でマラッカの地）の酋長が叛いた時にも、彼はまた日本人を率い、暹羅の
兵と合して大いにこれを破って凱旋した。

そこで、王はその功を賞して、彼を六昆の領主としたのみならず、特に王女をその妻にした。 長政は、
その後も国政にあづかっていたりして暹羅のためにつくしていたが、やがて国王が亡くなった後に、重臣のカ
ウハンという者のために毒殺された。 我が寛永10年（西暦1633年）のことです。 このように、最後
ひさん うんめい まった せきしゆくけん も ぶゆう
は悲惨な運命に終わったとはいえ、全く赤手空拳を以って渡航しながら、よく日本人の武勇を示して、
他国の貴族となり、国王の婿とまでなったのは、世にも珍しい痛快な事ではありませんか。

はま だ や へ え 浜田弥兵衛

はま だ や へ え すえつぐへいぞう
浜田弥兵衛は長崎の人で、末次平蔵

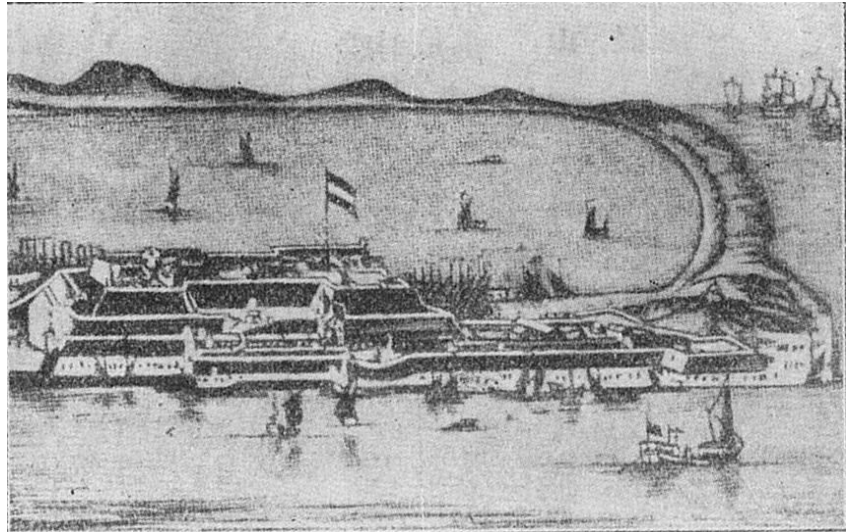
の御朱印船に乗り込んでいた船長で
す。 そのころ、台湾の安平および台
なん よ
南に拠って台湾貿易の利益を独占し
ようとしていたオランダ人が、我が
商船に積んだ貨物をしばしば没収
したりしたのを弥兵衛は憤慨して、

寛永5年3月、弟の小左衛門、子の
しんぞう
新蔵およびその地の乗組員と共に、

へいぞう アンピン たいなん
平蔵の船で安平（台南）のゼーランジャ城に行って、時のオランダの太守ヌイツの不意を襲ってこれを捕
らえ、その不法を責めて、さきに没収した品々をことごとく返させた上に、その子の12才になると、外
に四人のオランダ人とを人質に取り、今後、決して日本人に無礼を加えないように誓わせて、めでたく帰朝
した。

そうとく しゃざい オランダ総督の謝罪

幕府は大いに弥兵衛の功を賞して、5人の人質はこれを大村の牢屋に繋いだ上に、平戸におけるオ
ランダ人の商業を禁止した。 そこで、爪哇のバタビアのオランダ総督は使いをわが国に送って、この事
件の始末をつけようとしたが、幕府が容易に許そうともしなかつたので、ついに寛永9年に、ヌイツの職
を免じて、これをわが国に護送して謝罪した。 そこで幕府はヌイツを牢屋に入れて、貿易は再びこれを
許した。 なお、ヌイツの子は寛永7年に牢屋で病死し、他の4人は、再び貿易を許すと共に放免した
が、ヌイツをも、後、寛永13年（西暦1636年）になって、許してバタビアに帰らせた。



ゼーランジャ城
アンピン ぎづ
台湾 台南の安平にオランダが築いた城

第6話 外国との交通

これらは特に 著^{いちじる}しい 1, 2 の例でして、当時の国民の意気は一般に実に^{じつ さか} 壮んだったのです。ところが、たまたま宗教上の問題が起こって、この海外発展の^{きうん いっちょう} 気運が一朝にして 全く^{まったく} 挫折するに至ったのは、まことに遺憾^{いかん}な事でありました。その仔細^{しさい}は話を^{あらた} 改めて次に述べることにします。

(第6話 外国との交通 終わり。 次は前頁に戻り、第7話 島原の乱と鎖国)